

遠い春

齋藤 貢

ひとの声が届かぬところに
そっと、火をつけて。
だれにも気づかれぬように
災いや恐怖を、そこに置き去りにしたままで。

春は、一目散に逃げていった。

取り返しのつかないあやまちをたくさん残して。

汚れたあしうらを

どれほど洗い落としても
土地の痛みは消えないだろう。

みちのくの
小さな声が、見えない春に問いかけている。
火をつけたのは、だれか。
恐ろしい災いを置いていったのはだれか、と。

あの日から、
ひとはうなだれて、肩を落として歩いている。
苦しいなあと、ころのなかでつぶやいている。

奥歯をかみしめて
必ずまたここに戻ってくるからね、と
ひとは、何度も同じことばを口に出しては
それでもまだ、迷っている。

春は戻って来るのかしら、ね。

みちのくは、花冷えの遠い春だ。

かえ
辞し

東日本大震災と原発事故によって、ふくしまは、放射線に苦しめられました。
そして、ひとの分断にも。強制的に避難を余儀なくされたひと。自主避難せざるを得なかったひと。避難したくても避難できなかったひと。それぞれが孤独な戦いを強いられました。それはまだ終わりません。「帰還困難区域」が残されていて。ふるさとに戻れないひととたくさんいて。